

# 木下家住宅（勝山市）の歴史的意義

吉田 純一

## The Historical Importance of Kinoshita-House in Katsuyama-City

Junichi YOSHIDA

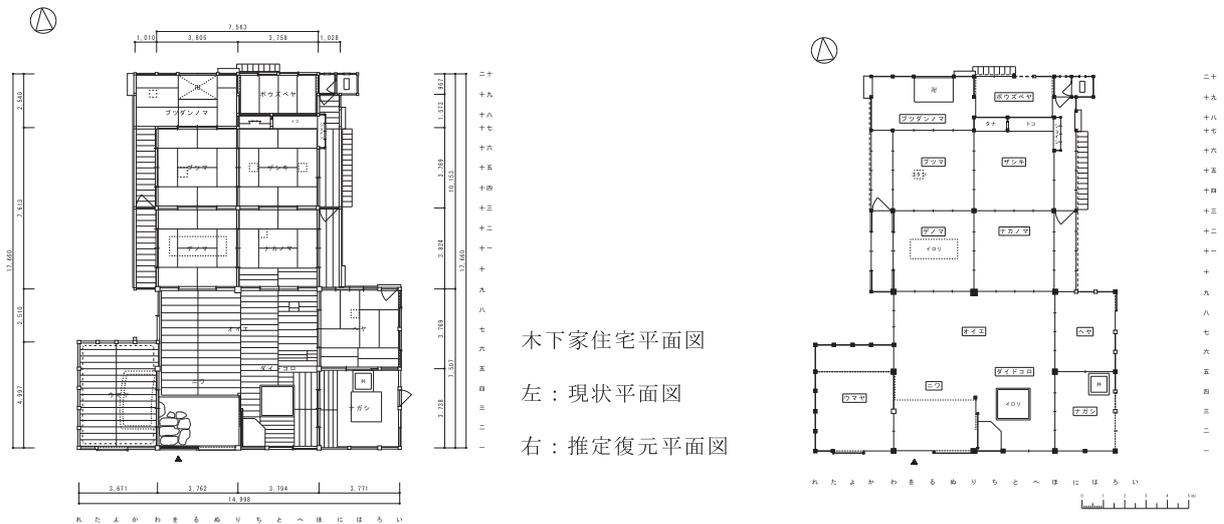
The Kinoshita house in Katsuyama city, Kitagou-cho Ueno is the old farmers house which was built at 10th year of Tempo(1839) in Edo period. It is a typical case with the farmers houses that exist in the region in Fukui city, Ono city, and katsuyama city, etc. The Kinoshita house is one of the valuable, historical architecture in the Fukui prefecture.

*Keyword* : Kinoshita house, farmers house, type of Echizen II, later of Edo period

### 1. はじめに

木下家住宅は、福井市から大野・勝山の奥越地方に広く分布していた越前Ⅱ型の形式をもつ大型の民家で、天保6年(1835)～同10年につくられている。前方の左右にツノヤを突き出す両袖造や出桁造の手法、民家特有の豪壮な室内構成をもつ4間四方の広い板敷きのオイエ、その上手に8畳4室からなる数寄屋風意匠の整った座敷とさらにブツダンノマ・ボウズベヤなどをもつことなどに特徴がある。また増改築が少なく、創建当初の状態をよく留めていること、普請帳から建築年代やその経緯がわかること、永平寺大工が手掛けた事例で、彼らの優れた技術が随所に伺える、質の高い民家であることも注目される。

これらについては、すでに『木下家住宅(報告書)』<sup>(1)</sup>において指摘しているが、ここでは周辺地域の他の事例と比較しながら、木下家住宅の歴史的意義や重要性について考察する。



\* 建築学科

## 2. 越前Ⅱ型の民家との比較

福井県内の近世民家調査は、昭和43年に実施され、その成果は『福井県の民家』(昭和44年度)にまとめられ、報告されている<sup>(2)</sup>。これによれば、県内の民家は平面形式や構造手法から越前と若狭で大きく異なり、越前型と若狭型に大別される。越前型はさらに大きく4つの形式に細分され、それぞれ越前Ⅰ型、越前Ⅱ型、越前Ⅲ型、越前Ⅳ型と呼称されている。これらは平面形式や軸部の構成に相違が認められ、分布地域も異なっている<sup>(3)</sup>(表1、図1)。木下家住宅はこの調査時には対象からもれていたが、昭和58年に福井宇洋氏によって詳細な調査がなされ、越前Ⅱ型の最も発達した状態を留める貴重な民家であることが指摘されている<sup>(4)</sup>。

表1 越前型民家の分類(『福井県の民家』より)

形式	平面形式	正面	小屋組	軸部	1間の長さ	分布
越前Ⅰ型 (Ⅰ'型)	表側に台所・土間・馬屋をとり、奥に仏間・座敷をとる ツノヤ発達	平入	合掌(サス)	部屋部分を指物でかため、ここより梁を配す	6.2尺が多い	南越
越前Ⅱ型	前半部がオウエの大きな部屋・座敷となる	妻入(平入)	〃	ニワ、オウエ部分を一つの空間として大きくつくる	〃	大野盆地 越前平野
越前Ⅲ型	いわゆるヒロマ型	妻入	〃	桁行に主要な梁を配す	〃	県北部
越前Ⅳ型	奥手に大きな台所をとる	平入	〃		〃	越美境

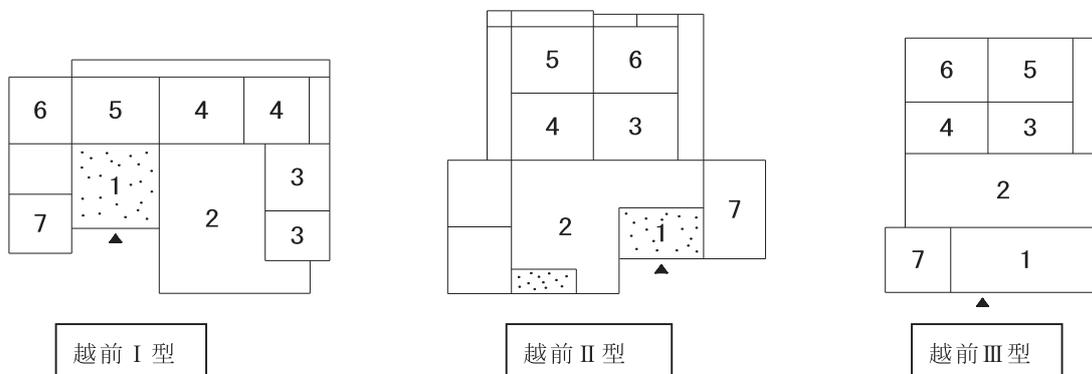


図1 越前型の間取模式図(1ドマ 2オイエ 3ナンド 4ナカノマ 5ザシキ 6ブツマ 7ウマヤ)

『福井の民家』に掲載されている越前Ⅱ型の代表的事例は、図2に示す通りである。現存最古の例は18世紀初期成立と推定される橋本誠一氏宅(2-① 現旧橋本家住宅、国重文指定)である。桁行7間、梁間4間半、平入りの民家で、前方に大きな土座のニワ、その上手に上ザシキ(8畳)・下ザシキ(8畳)の2室がつく。これよりやや遅れ、18世紀後半の成立とみられる岩谷美喜三氏宅(2-②)は、主屋が桁行5間半、梁間4間半、妻入りで、入り口左手にウマヤをツノヤとして張り出し、広い板敷きのニワ(元は土座)とその奥にオク(8畳)とイナグラ(8畳)の2室をとる。両住宅はともに庄屋を務めた18世紀の有力な上層民家であるが、木下家住宅に比べると、小規模で、平面形式もニワと2室からなっていて簡素な構成であることがわかる。

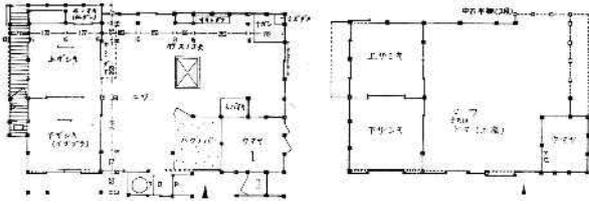
ところが、19世紀に入ると、一回り大きな越前Ⅱ型の事例がみられるようになる。木下家住宅がある北郷町の隣り合う荒土町の下牧久兵衛氏宅(2-③)は、19世紀初期の成立と推定され、同じような庄屋の家柄をもつ民家である。主屋は桁行11間半、梁間5間、平入りの形式で、板敷きの広いニワとその上手表側にシキダイノマとブツマ(ともに8畳)、裏側にオウエとトコ・タナ・ショインの座敷飾を整えた9畳のホンザシキが田の字型に配される。そしてブツマの上手にほぼ長4畳大のブツダンノマがつき、18世紀の事例と比べると、はるかに整った平面構成をもっている。当氏宅はニワの下手にウマヤとスイジバがつく直屋のために、桁行規模は木下家住宅より大きい。ニワや上手の座敷の構成、室内意匠などは木下家住宅によく似ている。

下牧久兵衛氏宅と同じような大規模な越前Ⅱ型民家の事例を少し広域にみても、青木正光氏宅(2-④ 旧足羽町、18C前半)、蓑輪又兵衛氏宅(2-⑤ 旧今立町、18C前半、現在、おさごえ民家園移築、福井市指定文化財)、森坂市太夫氏宅(2-⑥ 福井市、18C中期)、滝ヶ花俊明氏宅(2-⑦ 旧今立町、19C前半)、梅田九則氏宅(2-⑧ 旧足羽町、現おさごえ民家園移築 天保～弘化年間)、城地豊種氏宅(2-⑨ 大野市蕨生、18C中、現在、おさごえ民家園移築、福井市指定文化財)、島田七郎兵衛氏宅(2-⑩ 朝日町、19C前半)、永宮伝左衛門氏宅(2-⑪ 武生市、19C前半)、清水六右衛門氏宅(2-⑫ 鯖江市、19C前半)、小嵐弥一氏宅(2-⑬ 美山町、19C中期)、森本守氏宅(2-⑭ 福井市、1900年ごろ)、砂村滝元氏宅(2-⑮ 松岡町、約200年前)などがある。

青木正光氏宅(2-④)、蓑輪又兵衛氏宅(2-⑤)、森坂市太夫氏宅(2-⑥)、城地豊種氏宅(2-⑨)の建築時期は18世紀代に推定されているが、青木氏宅は座敷に大きな改造がみられ、蓑輪氏宅の座敷部は19世紀になって増設されたものである<sup>(5)</sup>。また、城地氏宅は様式からみて18世紀に遡るものではなく、江戸末期と推定できる<sup>(6)</sup>。森坂氏宅は現存せず、建設当初の状態は確認できないが、これら4氏宅以外はすべて19世紀以降の民家と報告されている。したがって、越前Ⅱ型民家において、木下家住宅と同じような4室構成の整った座敷をもつ大型民家が成立したのは19世紀以降とみてよい。なお、これらのうち、蓑輪氏宅・梅田氏宅・城地氏宅の3棟は、福井市おさごえ民家園に移築され、現存している。

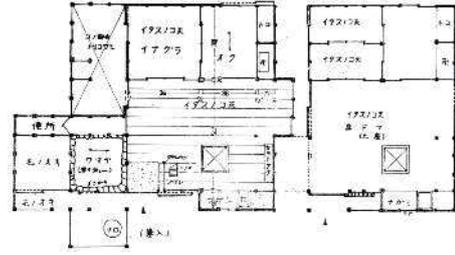
表2 越前Ⅱ型のおもな民家(『福井の民家』より)

	民家名	所在地	建築時期	規模	特徴
①	橋本誠一氏宅	大野市宝慶寺	18C初期	桁行7間、梁間4間半、平入り	大きなニワ(元は土座)の上手に8畳の上・下ザシキ2室
②	岩谷美喜三氏宅	勝山市大矢谷	18C後半	桁行5間、梁間4間、妻入り	広いドマ(土座)の奥に8畳大のオクとイナグラ
③	下牧久兵衛氏宅	勝山市荒土町	19C初期	桁行11間半、梁間4間、平入り	板敷きの広いニワの上手に田の字型の4室構成
④	青木正光氏宅	足羽町	18C前半		
⑤	蓑輪又兵衛氏宅	今立町	18C前半		
⑥	森坂市太夫氏宅	福井市	18C中期		
⑦	滝ヶ花俊明氏宅	今立町	19C前半		
⑧	梅田九則氏宅	福井市	天保～弘化		
⑨	城地豊種氏宅	大野市	18C中期		大地主、江戸末期とみられる
⑩	島田七郎兵衛氏宅	朝日町	19C前半		
⑪	永宮伝左衛門氏宅	武生市	19C前半		
⑫	清水六右衛門氏宅	鯖江市	19C前半		
⑬	小嵐弥一氏宅	美山町	19C中期		
⑭	森本守氏宅	福井市	1900年ごろ		
⑮	砂村滝元氏宅	松岡町	約200年前		



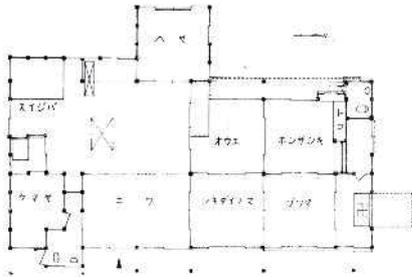
2-①橋本誠一氏宅

(左：現状平面図，右：復原平面図)

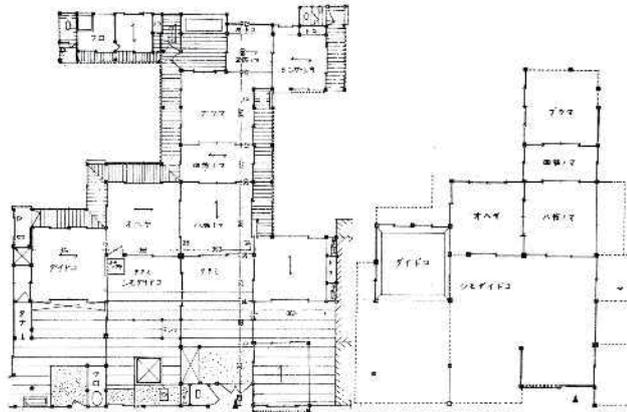


2-②岩谷美喜三氏宅

(左：現状平面図，右：復原平面図)

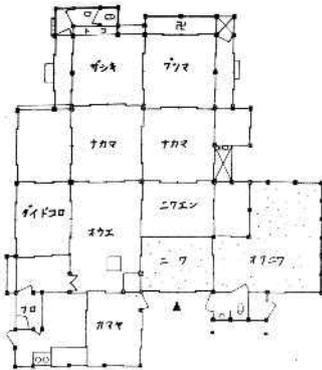


2-③下牧久兵衛氏宅

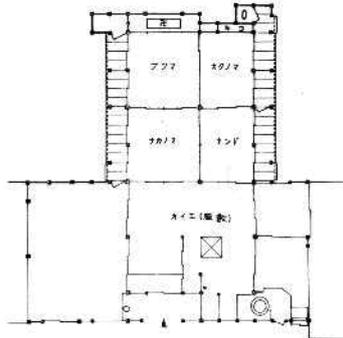


2-④青木正光氏宅

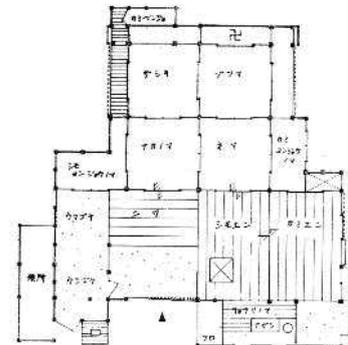
(左：現状平面図，右：復原平面図)



2-⑤簗輪又兵衛氏宅



2-⑥森坂市太夫氏宅



2-⑦滝ヶ花俊明氏宅

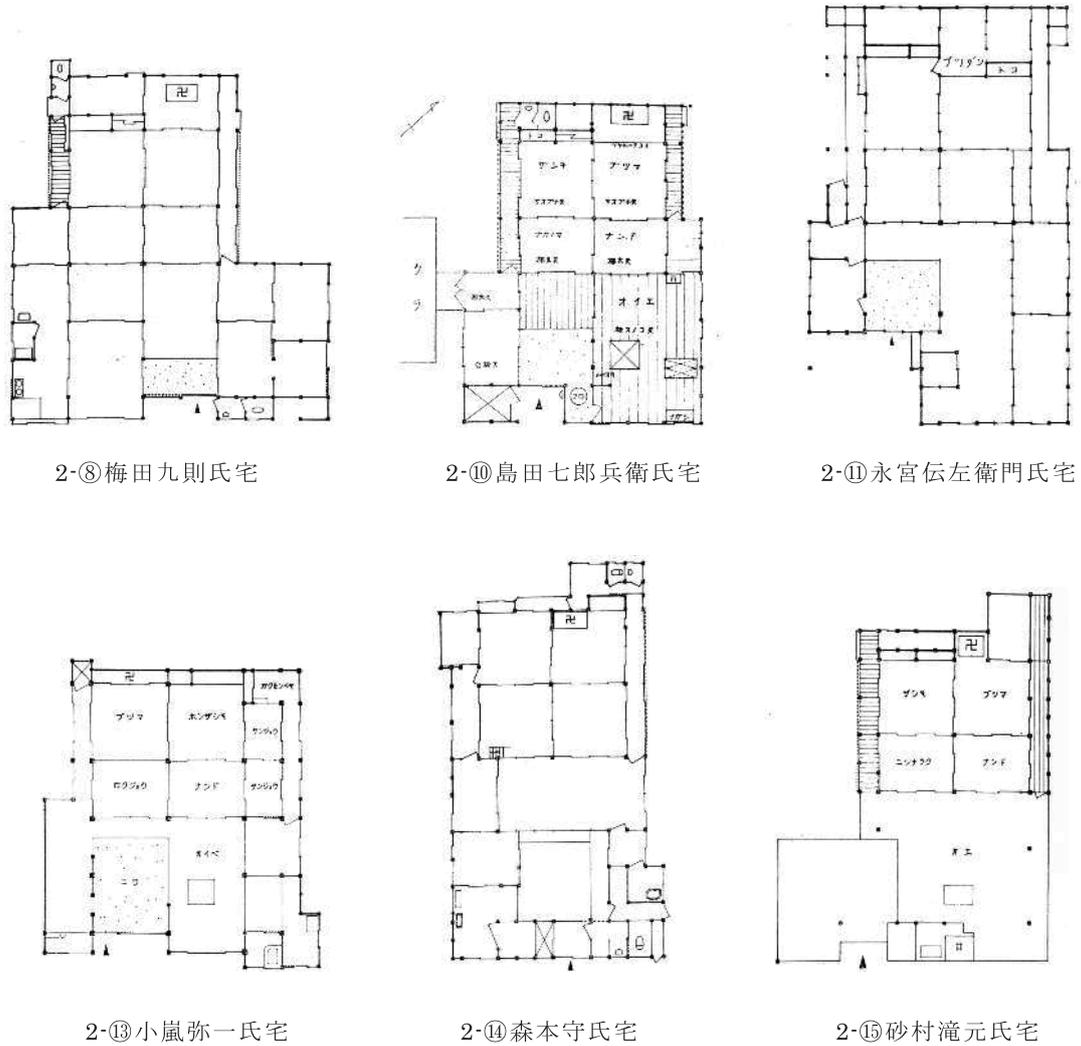


図2 越前Ⅱ型のおもな民家の平面図(『福井の民家』より)

### 3. 御本陣居宅との比較

河野次郎右衛門家(旧武生市本保町)所蔵の「天保九年 御巡見様御本陣居宅絵図下書 郡中惣代控」<sup>(7)</sup>(以下、「居宅絵図下書」と呼ぶ)は、藩政期に本保代官所の割元を務めていた河野次郎右衛門が幕府巡見使の本陣に宛てるべき越前各村の庄屋や有力高持層の家々について、その間取りを差し出させた記録の控帳である。本項ではこの「居宅絵図下書」を主史料として、木下家住宅と当時の庄屋クラスの家屋を比較検討する。

「居宅絵図下書」に記された家屋は、南条郡・丹生郡・坂井郡・大野郡の各村に及んでいる。その中で現在の勝山市域が含まれる旧大野郡内に限ってみると、西山村(現大野市)の彦左衛門宅(3-①)・円助宅(3-②)・弥三兵衛宅(3-③)、東野村(同)の喜右衛門宅(3-④)・甚右衛門宅(3-⑤)・仁左衛門宅(3-⑥)、甚右衛門宅(3-⑦)、崎崎村(同)の〈石渡〉甚左衛門宅(3-⑧)と六左衛門宅(3-⑨)、下荒井村(現勝山市)の〈鳥山〉次郎兵衛家(3-⑩)の10戸の間取りが記録されている(表3、図3)。

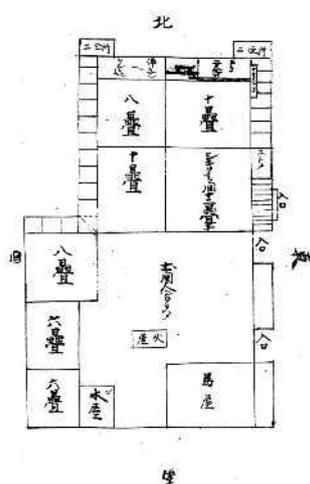
これらの平面図をみると、梁間は4間～5間前後、桁行は9間～10間程度が多く、座敷は田の

字型4室の構成をもつのが一般的で、規模や座敷の構成は木下家住宅に類似しているものが多い。また、10例中6例は前方の土間(台所)の両側にそれぞれ馬屋と水屋をツノヤで張り出す両袖造の形態を有していたことが想定でき、木下家住宅の特徴のひとつである両袖造の形態も当時の庄屋クラスの家に広くみられたことがわかる。さらに木下家住宅は4室構成の座敷の上手に1間のブツダンノマ・ボウズベヤがつき、整ったブツマの構成をもつ。このブツマやブツダンノマ・ボウズベヤの構成は真宗王国を誇る越前民家の大きな特徴の一つである。しかし、10例の中で、木下家住宅と同じようにブツマ・ブツダンノマの構成をもつのは、わずかに喜右衛門家(3-④)と仁左衛門家(3-⑥)だけである。したがって、木下家住宅のブツマ・ブツダンノマの構成は当時の庄屋クラスの中でも特に整った状態を示しているとみることができる。

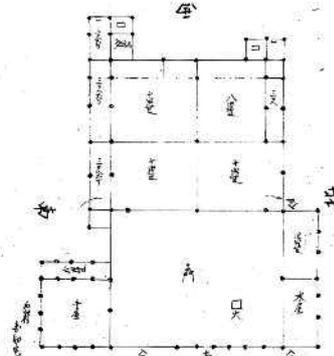
以上のように、木下家住宅は、江戸時代後期から幕末に近隣地域の存在していた庄屋クラスの家の規模や間取り、あるいは両袖造の形態を今に伝えるとともに4室構成の座敷に加えてブツダンノマやボウズベヤがつく構成は、当時の庄屋クラスの家の中でも最も整った状態を有していたことが指摘できる<sup>(8)</sup>。

表3 大野郡の御本陣居宅 {「天保九年戊三月 御巡見様 御本陣居宅絵図下書 郡中惣代控」(河野次郎右衛門家文書)}

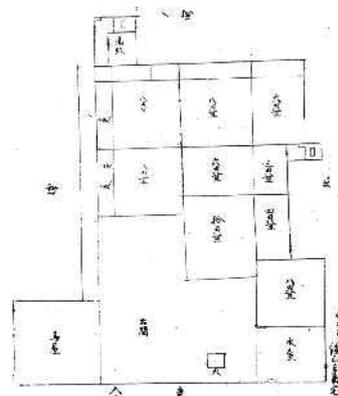
	村	居宅名	規模(梁間・桁行)間	ツノヤの形態	座敷構成	備考
①	西山村	彦左衛門宅	4.5×10	片ツノ	田の字型4室構成	庄屋役、西山村:幕府領 694.602石
②	西山村	円助宅	5×8	両袖造	田の字型4室構成	庄屋、
③	西山村	弥三兵衛宅	4.5×9	両袖造	主要座敷は5室	(印牧一弥家)、庄屋役
④	東野村	喜右衛門宅	御本陣 4.5×8.5	両袖造	田の字型4室構成+ブツマ、さらに10畳2室と7.5畳の別棟座敷あり	庄屋・長百姓役、持高108.85石、村内最高、東野村:幕府領 村高826.281石 257人(寛延3年(1750)明細帳)
⑤	東野村	甚右衛門宅	4×6	両袖造、背後にツノヤ	2列6室構成、背後にザシキ張り出す	庄屋役、持高80石、村内第2位
⑥	東野村	仁左衛門宅	5×9.5	直屋	4室座敷構成+別棟8畳ザシキ	庄屋役、持高75石、村内第3位
⑦	東野村	甚右衛門宅	主屋 4×5.5 別棟座敷部 5×6	主屋は両袖造、ただし、主屋座敷は2室構成	主屋と別棟に4室構成の座敷あり、その上手にブツマもあり	
⑧	崎寄村	甚左衛門宅	御本陣 6.5×9	ウマヤは前方に張り出す	座敷10畳4室	天保4年建築、(石渡)甚左衛門、庄屋役、崎寄村:幕府領 村高253.65石
⑨	崎寄村	六左衛門宅	御本陣 4.5×9	直屋、ウマヤ、水屋は前方につく	田の字型4室構成	
⑩	下荒井村	治郎兵衛宅	御本陣 5×9.5	直屋、ウマヤ、水屋は前方につく	田の字型4室構成	烏山治郎兵衛家、文化10年(1813)普請帳、庄屋・長百姓役、下荒井村:幕府領 村高232.41石(天保郷帳) 家数26軒、134人(寛政12年明細帳)



3-①彦左衛門宅



3-②円助宅



3-③弥三兵衛宅

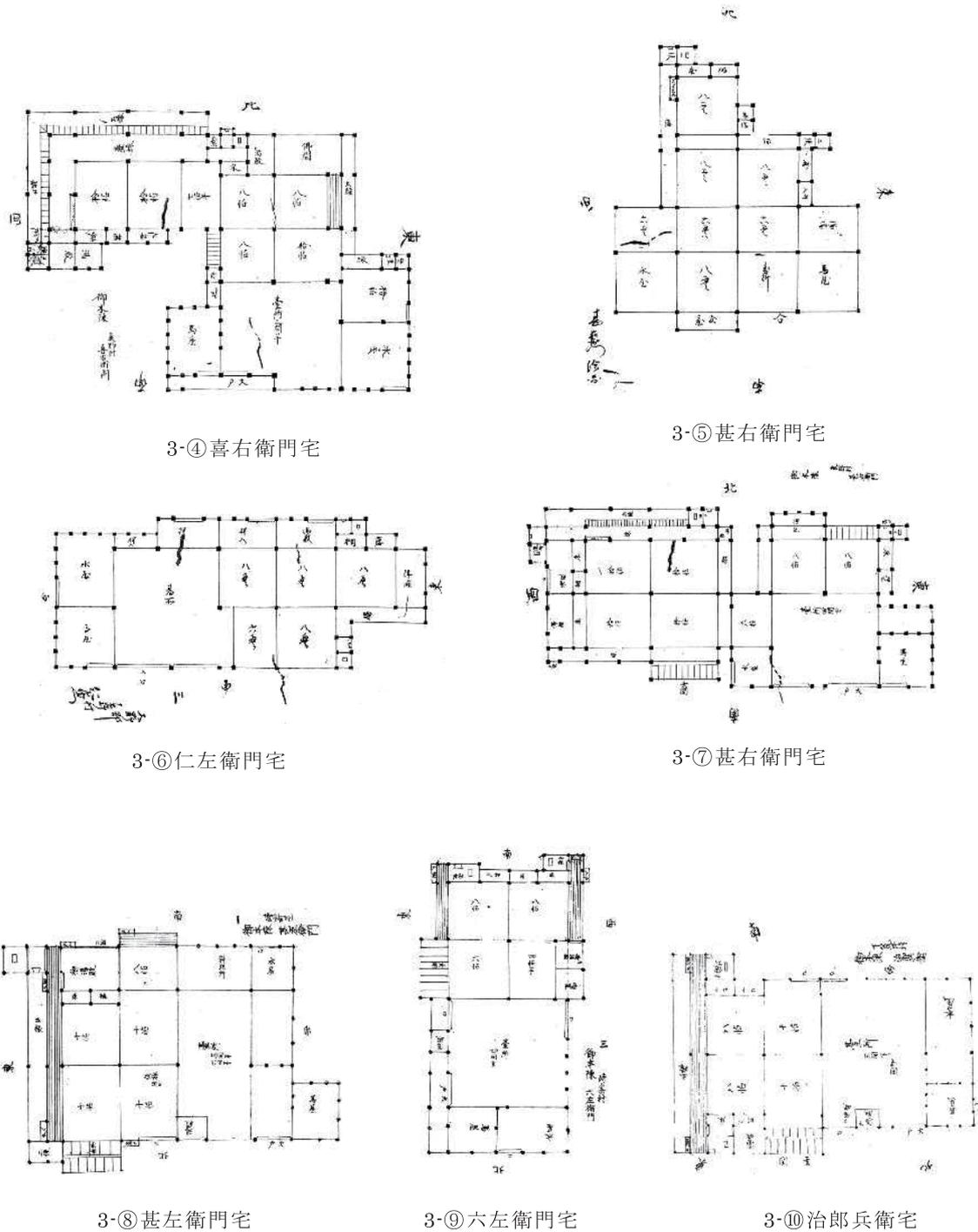


図3 大野郡の御本陣居宅の平面図

#### 4. 県内の重要文化財指定民家との比較

福井県内において国重要文化財指定されている民家は、坪川家住宅(坂井市丸岡町)、旧橋本家住宅(大野市宝慶寺)、相木家住宅(南越前町宮崎村)、旧瓜生家住宅(鯖江市水落)、堀口家住宅(福井市池田町)、旧谷口家住宅(越前市余川町)の6棟である<sup>(9)</sup>(図4)。このうち坪川家住宅(4-①)は、県北部域に分布する越前Ⅲ型の遺構で、江戸初期と推定される県内最古の民家である。旧瓜生家

住宅(4-②)も同じⅢ型であるが、家柄は社家である。相木家住宅(4-③)・堀口家住宅(4-④)・旧谷口家住宅は、越前市や鯖江市など南越地域に広く分布する越前Ⅰ型の例であり、木下家住宅と同じ越前Ⅱ型の例は旧橋本家住宅(4-⑤)のみである。しかも旧橋本家住宅は前述のように18世紀初期に遡る古例であり、木下家住宅と比べて小規模で、間取りも簡素である。したがって、木下家住宅のような越前Ⅱ型の発展した状態を留める事例は重文民家の中にはないことになる。つまり、木下家住宅は、越前Ⅱ型の大規模で、整った事例として学術的にも貴重であることがわかる。

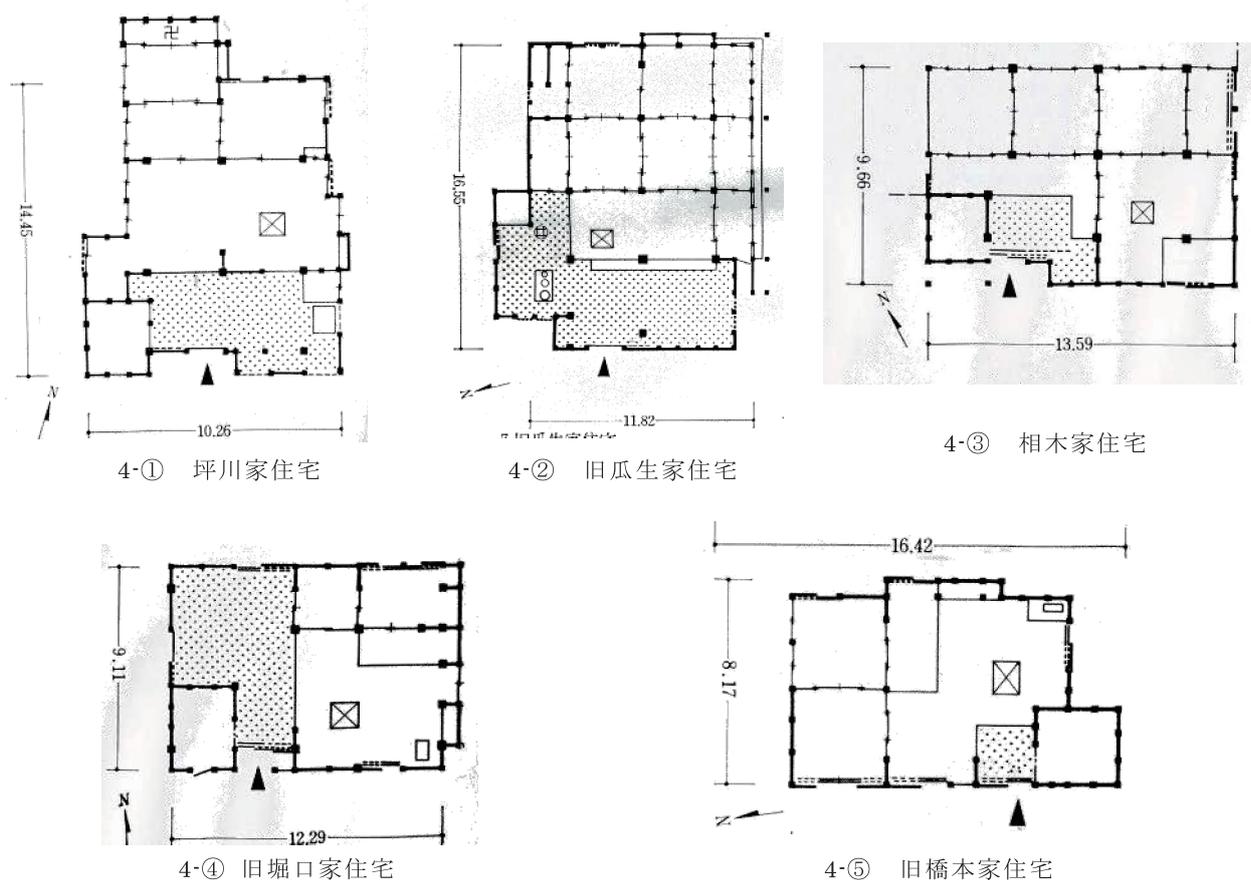


図4 福井県内の重要文化財指定民家の平面図(『重要文化財 17 建造物Ⅵ』より)

## 5. 勝山市域の明治以降の大型農家への影響

平成15年～同17年に福井工業大学吉田研究室によって勝山市域の歴史的建造物の調査が実施され、その成果は『勝山市の歴史的建造物』に報告されている<sup>(10)</sup>。この調査において、『福井県の民家』にみられた下牧久兵衛氏宅は、下牧清三郎家住宅(5-①)として現存が確認された。当家は切妻造の大きな瓦葺き屋根を乗せているが、これは恐らく後世の改造とみられ、古くは茅葺であったと推定される。

またこの調査で、下牧家住宅と同じように桁行10間前後で、切妻造の瓦屋根をもつ大規模な農家が勝山市域において周辺村落ごとに1～2棟現存していることを確認できた。片瀬の丸山清士家住宅(5-②)、荒土町北新在家の本多門家住宅(5-③)、荒土町別所の横山龍男家住宅(5-④)、



ったが、明治以降の大型農家ではほぼ例外なく、認められる。こうした座敷とともにブツマ・ブツダンノマ・ボウズベヤは、真宗王国越前の厚い信仰心を如実に示す空間であり、県内民家の大きな特徴でもある。以上のように、木下家住宅は、明治以降に勝山市域の大型農家にみられる整った座敷構成をもつ、先駆的な事例としても注目される。

## 6. まとめ

木下家住宅は福井市から大野・勝山の奥越地域にかけて広く分布していた越前Ⅱ型に類型される民家の中でも特に整った平面構成を持つ大規模な民家の現存事例である。前方のオイエ（ニワ）の左右にウマヤとミズヤをツノヤで張り出す両袖造と呼ばれる特徴的な形態は、江戸時代後期から幕末において近隣地域の庄屋クラスの家にもみられる表構えを今に伝えるものであり、ブツマやブツダンノマの構成は当時の庄屋クラスの家でも特に整っていたことが伺える。そしてこの平面構成は、明治以降の瓦葺の大規模農家にも引き継がれていたことも注目される。

以上のように、木下家住宅は江戸時代後期から幕末における越前Ⅱ型の庄屋クラスの家構えを今に伝えるとともに、明治以降につくられた市域の大規模な農家につながる、きわめて貴重な民家遺構であり、福井県の近世民家史の系譜を捉える上で、学術的にも大きな意義を有していることを指摘できる。

註1 『福井県指定有形文化財木下家住宅 江戸時代後期の有力農家住宅総合調査報告書』

勝山市教育委員会 2007

註2 『福井県の民家 民家緊急調査報告書』福井県教育委員会 昭和44年度

註3 越前Ⅳ型は、事例が少ないこともあり、図1 越前型間取模式図では省略している。

註4 福井宇洋「木下家住宅と普請帳に関する考察」福井大学工学部研究報告 第33号 昭和60年9月

註5 『蓑輪家住宅調査報告書』福井市教育委員会 平成20年度

註6 『福井市指定文化財目録』

註7 「天保九年 御巡見様御本陣居宅絵図下書 郡中惣代控」 河野次郎右衛門家所蔵

註8 木下家住宅のボウズベヤは、ユドノと呼ばれていたとも伝わっている。現在の木下家のボウズベヤにユドノをうかがわせる痕跡はないが、他の庄屋クラスの家でもザシキの近くに「ユドノ（湯殿）」をもつ例があり、古くはユドノが一般的であったことも考えられる。この「ユドノ」は「上便所」などと同じように、賓客用の施設と考えられるが、室内の仕様や使われ方などは不明である。

註9 文化庁編『国宝・重要文化財建造物目録』第一法規 1992、

文化庁監修『重要文化財17 建造物Ⅵ 民家・洋風建築・橋梁』毎日新聞社 1975 など

註10 『勝山市の歴史的建造物』勝山市教育委員会 2007

(平成22年3月31日受理)